熊本県熊本市宮穴横穴群出土の遺物について

横　田　真　吾

はじめに

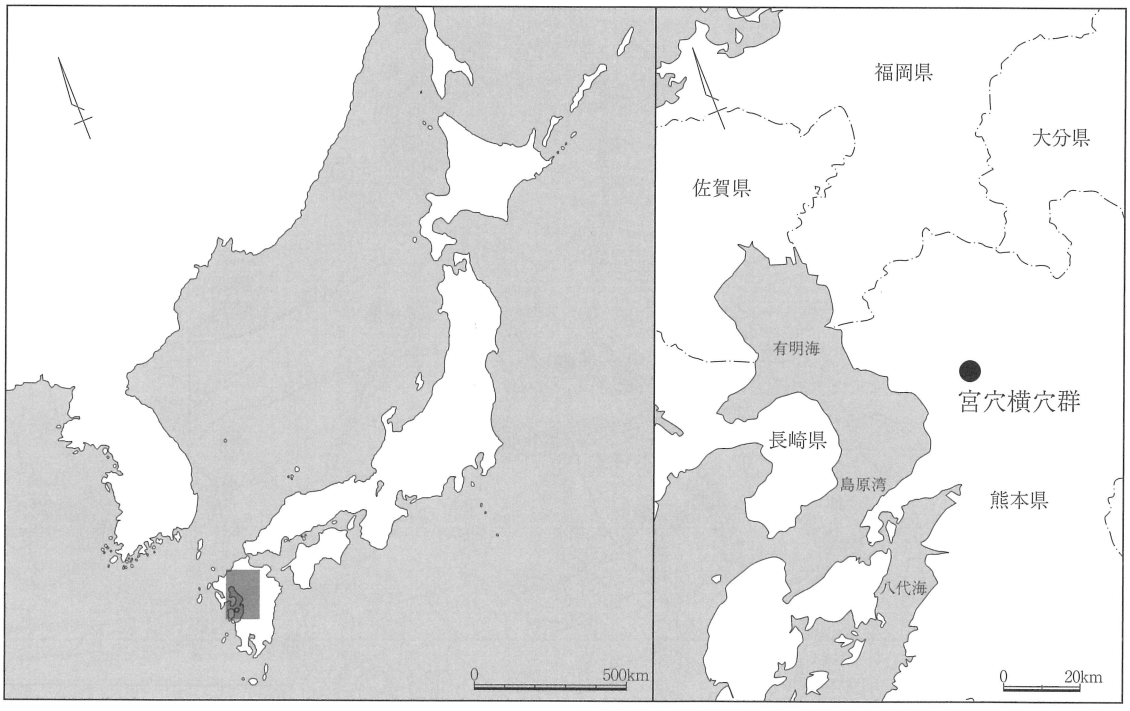
宮穴横穴群（埋蔵文化財包蔵地名は「加茂横穴群」）は、熊本県熊本市北区植木町の豊田川北岸斜面に位置する。本稿は、宮内庁書陵部陵墓課所管の宮穴横穴群出土遺物にかんするものである。この出土遺物については、『植木町史』(1)や現地の説明板に明治末年頃出土したという記述があるが、実際は公文書の記録から、明治25年（1892）以前に出土したものと考えられる。

宮穴横穴群関係の公文書は、明治25年の宮内省諸陵寮作成『考証録』に「熊本県山本郡吉松村大字豊田字加茂ニ於テ発見ノ古墳ハ御陵墓ノ見込ナキモ発掘品ハ諸陵寮へ差出スヘキ旨同県へ指令並発掘品買上ノ件」が綴じられていたと『諸陵寮公文書類件名録』1(2)に記されている。ただし、この『考証録』は大正12年（1923）9月1日に発生した関東大震災のため焼失した。それゆえ、件名以外の情報については不明であるが、明治25年の『考証録』に綴じられていたことから、宮穴横穴群の遺物は、明治25年以前に出土したものと確定できる。本稿では、標記遺物の概要報告をおこなったのち、宮穴横穴群出土遺物のなかで数がもっとも多い耳環について考察する。

1　宮穴横穴群の概要

遺物概要の前に、宮穴横穴群の概要と既往の調査について確認しておきたい。現状の宮穴横穴群では、加茂別雷神社を囲むように24基の横穴が存在しているが、実際にはそれら以外に埋没しているものもあり、横穴の総数は不明である。宮穴横穴群の上方には、円墳の豊田古墳が存在する。

宮穴横穴群の調査は、明治25年頃の発掘を除くと、昭和47年（1972）より熊本県立玉名高等学校などによって発掘調査と測量調査がおこなわれた(3)。その結果、土師器・須恵器・鉄鏃・把頭・耳環・玉類の出土があり、昭和49年刊行の『玉高考古学部部報』31号にそれらの実測図や横穴の測量図も掲載された。



第1図　宮穴横穴群　概略位置図（1/25,000,000、1/2,000,000）

しかし、この際出土した圭頭大刀の把頭については、図面が掲載されておらず、その後豊島直博によって図化され、平成27年（2015）にその位置づけがおこなわれた(4)。

また、昭和59年刊行の『熊本県装飾古墳総合調査報告書』では、新たに宮穴17号と22号横穴の実測図に加え、宮穴横穴群全体の測量図も掲載された(5)。

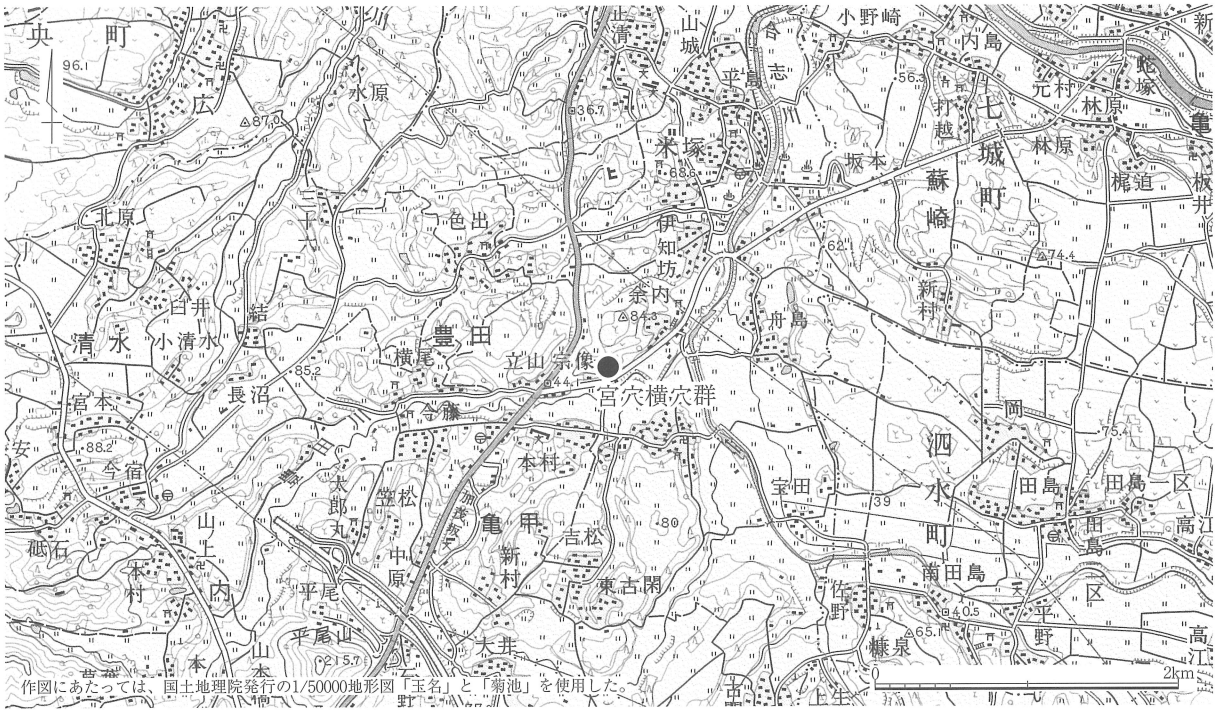
さらに、平成25年度には、宮内庁書陵部陵墓課と九州国立博物館の共同による考古資料の調査研究・展示プロジェクトの一環として、宮穴横穴群出土遺物のX線CT観察が実施された（巻頭図版4〜6）。その結果、耳環によっては芯の中央部分に比重が低い部分があることが判明した。この結果を、分析した当時は、X線が完全に透過しなかった可能性や、規格的な耳環を作るための型のようなものが推定されていたものの、作り方の詳細については、より微細な解析を必要とすると考えられた。本稿では、近年の科学的調査例などを参考に、耳環中央の比重が低い部分が何であるか、考察において私見を述べる。

2　宮穴横穴群出土遺物の概要

（1）宮内庁所管の遺物（第4〜7図、第9図）

現在宮内庁書陵部陵墓課には、耳環78点、空玉7点、勾玉11点、切子玉2点、平玉2点、管玉1点、丸玉1点、連珠玉1点、棗玉1点、小玉7点が存在する。それらの概要について順に述べる。なお、遺物の素材表記は、肉眼観察によるものであり、蛍光X線分析などによって理化学的に確かめられたものではない。本稿で鍍金と使う場合には、アマルガム法による消鍍金を指し、箔鍍金は含まないものとする。耳環は大きく分けて、無垢のもの、芯材に表装材を張るもの、芯材に表装材を張り鍍金するもの、芯材に鍍金するもの、中空で管状のもの、中空で管状のものに鍍金するものなどがあり、ここではそれぞれ材料となる金属名を記した。錫・鉄としたものは、X線CT画像や同大の銅芯耳環との比重差のほか、錆色より判断した。

耳環（第4〜6図）　銀無垢、銅芯金張、銅芯銀張、銅芯銀張鍍金、銅芯鍍金、銅管鍍金、銅芯、錫芯、鉄芯錫張、鉄芯の10種類がある。銀無垢（第4図1）、銅芯銀張（第4図20）、銅管鍍金（第6図78）、錫芯（第5図36）、鉄芯錫張（第5図42）、鉄芯（第6図77）は各1点である。銅芯金張は18点、銅芯銀張鍍金は47点、銅芯鍍金は4点、銅芯のみは3点である。銅芯・錫芯・鉄芯のみについては、金や銀などが張られていた可能性があるが、詳細は不明である。各個体の法量は、第1表を参照願いたい。



第2図　宮穴横穴群　位置図（1/50,000）

空玉（第７図）　全て半球形の銅板中央を内側から穿孔し、穿孔した半球形の材を２つ合わせて鍍金したものである。材の接合方法については、表面を鍍金によって覆うことでなされている可能性がある。しかし、断面の顕微鏡観察をおこなって、接合面の隙間にアマルガムが入ったことを確認していないので、詳細は不明である。高さは1.65から1.9 cmで、幅は1.45から1.65 cmである。

勾玉（第９図86～96）　硬玉製、瑪瑙製、滑石製のものに加えて濃緑色石材製のものがある。硬玉製は３点あり、ほぼ片面より穿孔されている。長さは３から4.5 cmで、幅は1.9から2.8 cmである。瑪瑙製は６点あり、片面より穿孔されているが、第９図90以外は穿孔方向の反対側が欠けている。長さは2.75から3.7 cmで、幅は1.65から2.25 cmである。滑石製は１点あり、片面穿孔の可能性がある。長さは2.25 cmで、幅は1.35 cmである。従来硬玉製とされてきた濃緑色石材のもの１点は、その色調だけでなく偏平な形状や法量からみても、ほかの硬玉製のものとは異なっている。長さは1.8 cmで、幅は1.3 cmである。

切子玉（第９図97、98）　水晶製のものが２点ある。双方上からみると六角形で、ほぼ片面より穿孔され、穿孔方向の反対側が欠けている。長さは1.2と1.4 cmで、幅は1.2と1.1 cmである。

平玉（第９図99、100）　碧玉製のものが２点ある。双方上からみると隅丸八角形で、ほぼ片面より穿孔され、穿孔方向の反対側が欠けている。長さは1.1と1.55 cmで、幅は1.2と1.6 cmである。

管玉（第９図101）　碧玉製のものが１点ある。下半分程度が欠けており、穿孔は片面・両面のどちらか不分明であるが、穿孔方向に偏りがあることから、両面からの可能性が高い。残存長は1.7 cmで、幅は0.75 cmである。

丸玉（第９図102）　瑪瑙製のものが１点ある。ほぼ球形で片面より穿孔され、穿孔方向の反対側が欠けている。長さ、幅ともに1.45 cmである。

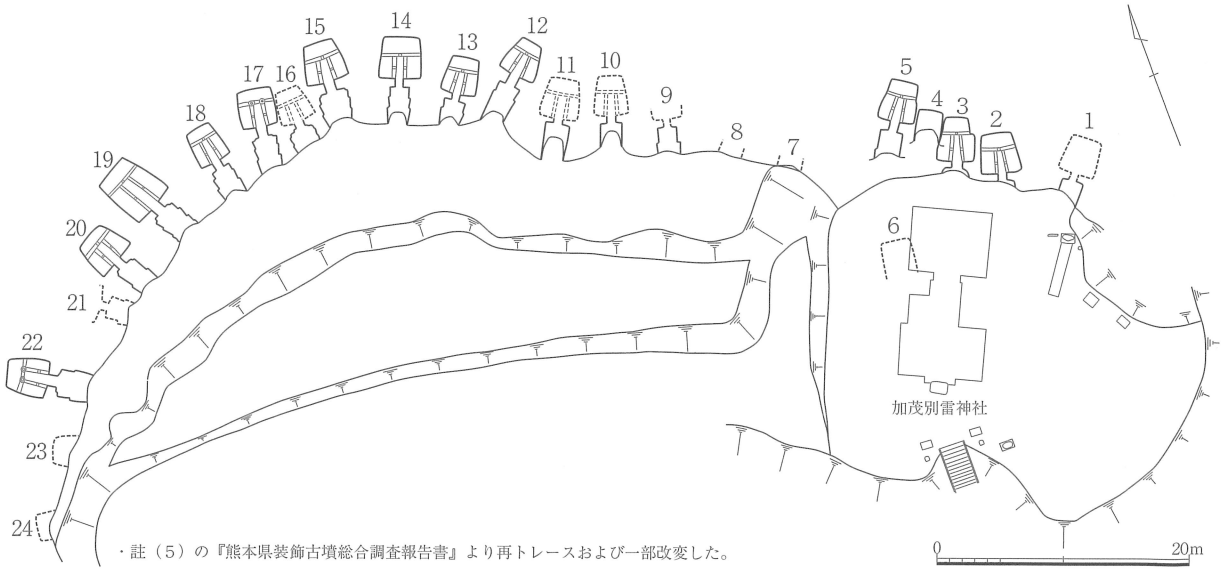
連珠玉（第９図103）　ガラス製のものが１点ある。色調は濃青色で、小玉が２点連なった形状をしている。長さは1.4 cmで、幅は0.8 cmである。

棗玉（第９図104）　ガラス製のものが１点ある。細長い形状から管玉とするか迷ったが、中央部が膨らんでいることから棗玉とした。色調は若干緑がかっている。長さは2.7 cmで、幅は１cmである。

小玉（第９図105～111）　ガラス製のものが７点ある。名称として小玉とするにはやや大きいものが含まれるが、瑪瑙製の丸玉と分けるため、一括して小玉とした。色調は110と111が濃青色で、他は濃緑色である。長さは0.6から0.9 cmで、幅は0.75から1.2 cmである。

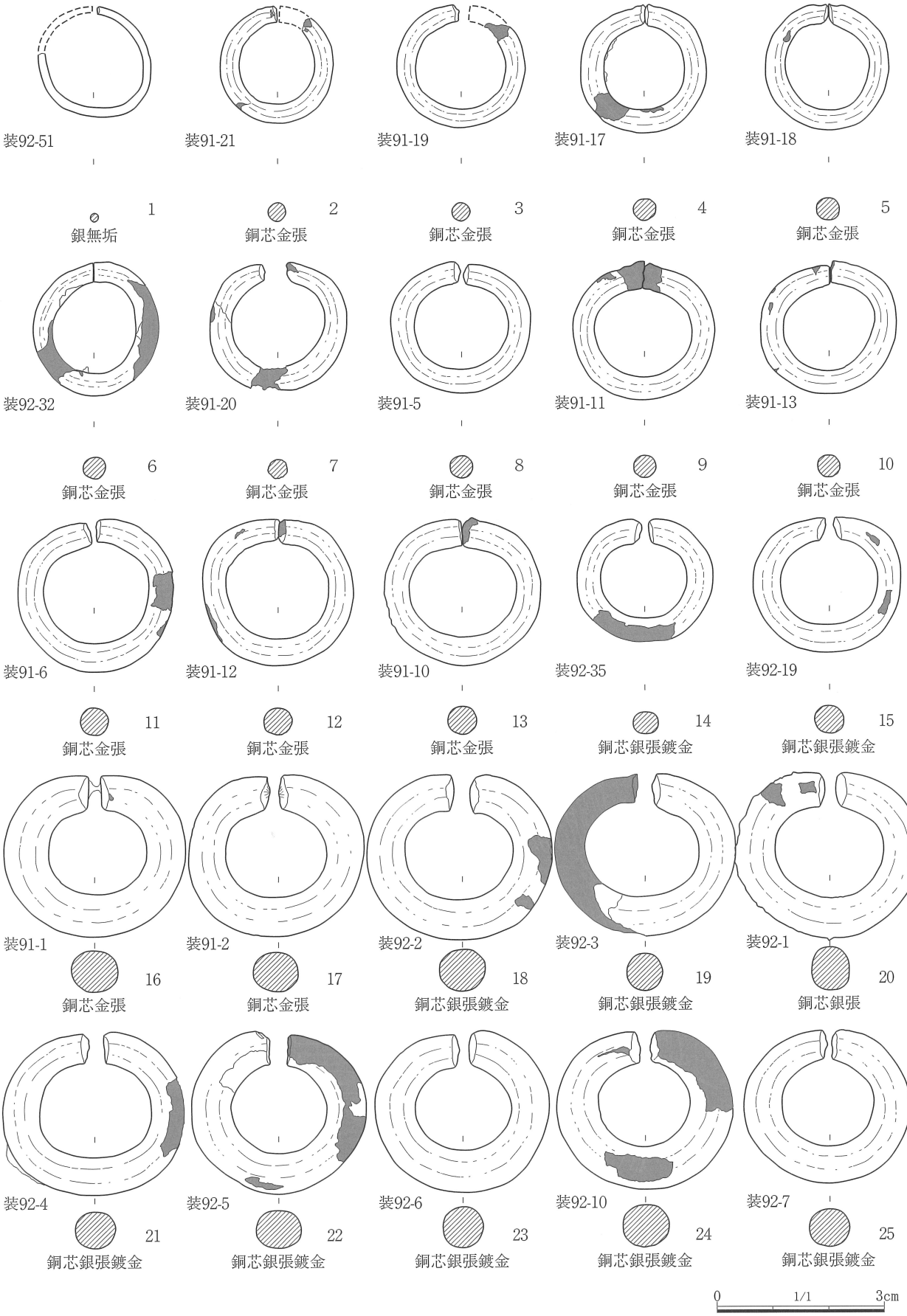
（２）宮内庁所管以外の遺物（第８図）

宮内庁所管以外の遺物では、土師器、須恵器、圭頭大刀柄頭、鉄鏃、耳環、玉類が出土している。それらの概要については、実見しておらず詳細不明なため、再トレース等をした図面を掲載するにとどめておく。

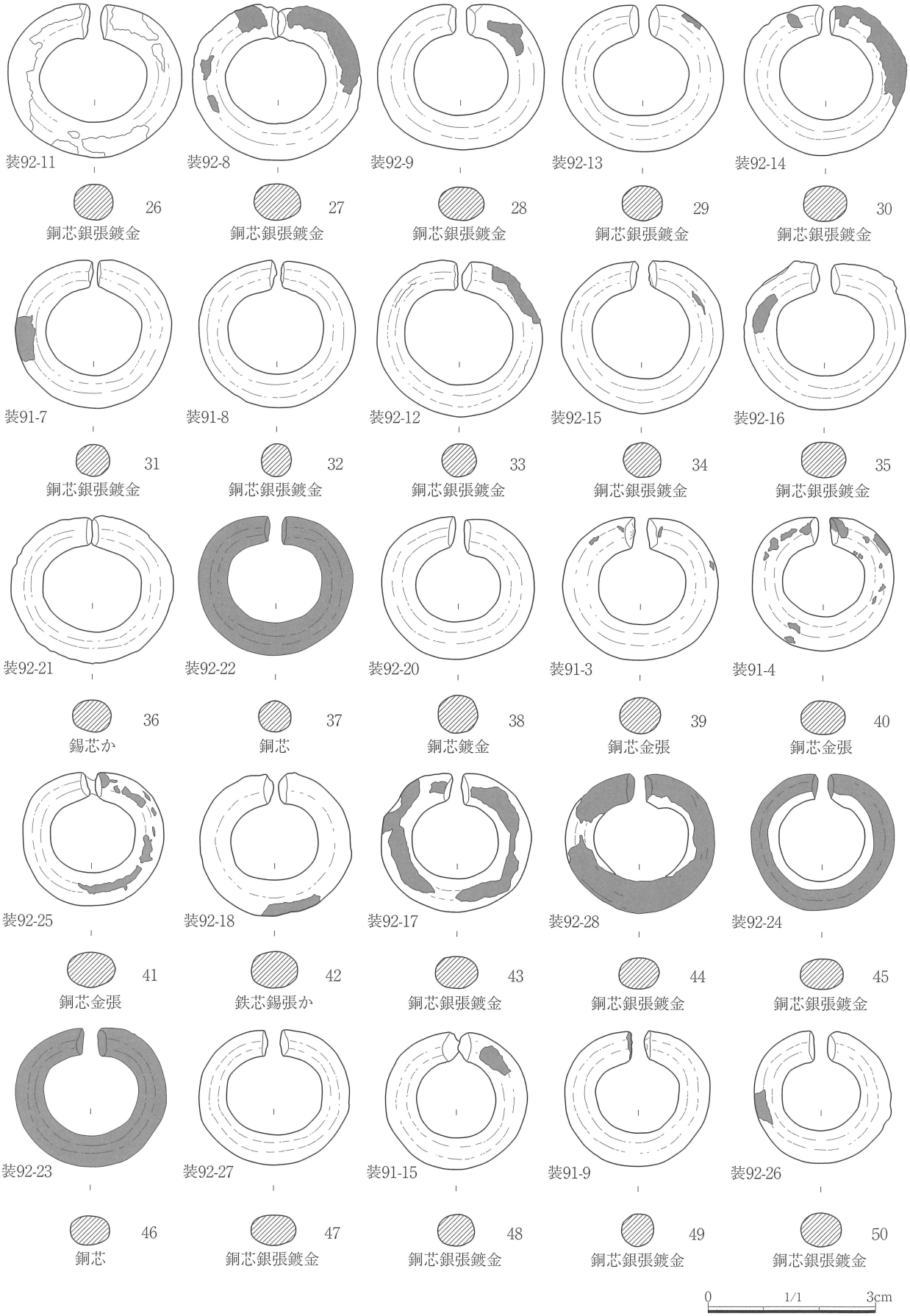


・註（５）の『熊本県装飾古墳総合調査報告書』より再トレースおよび一部改変した。

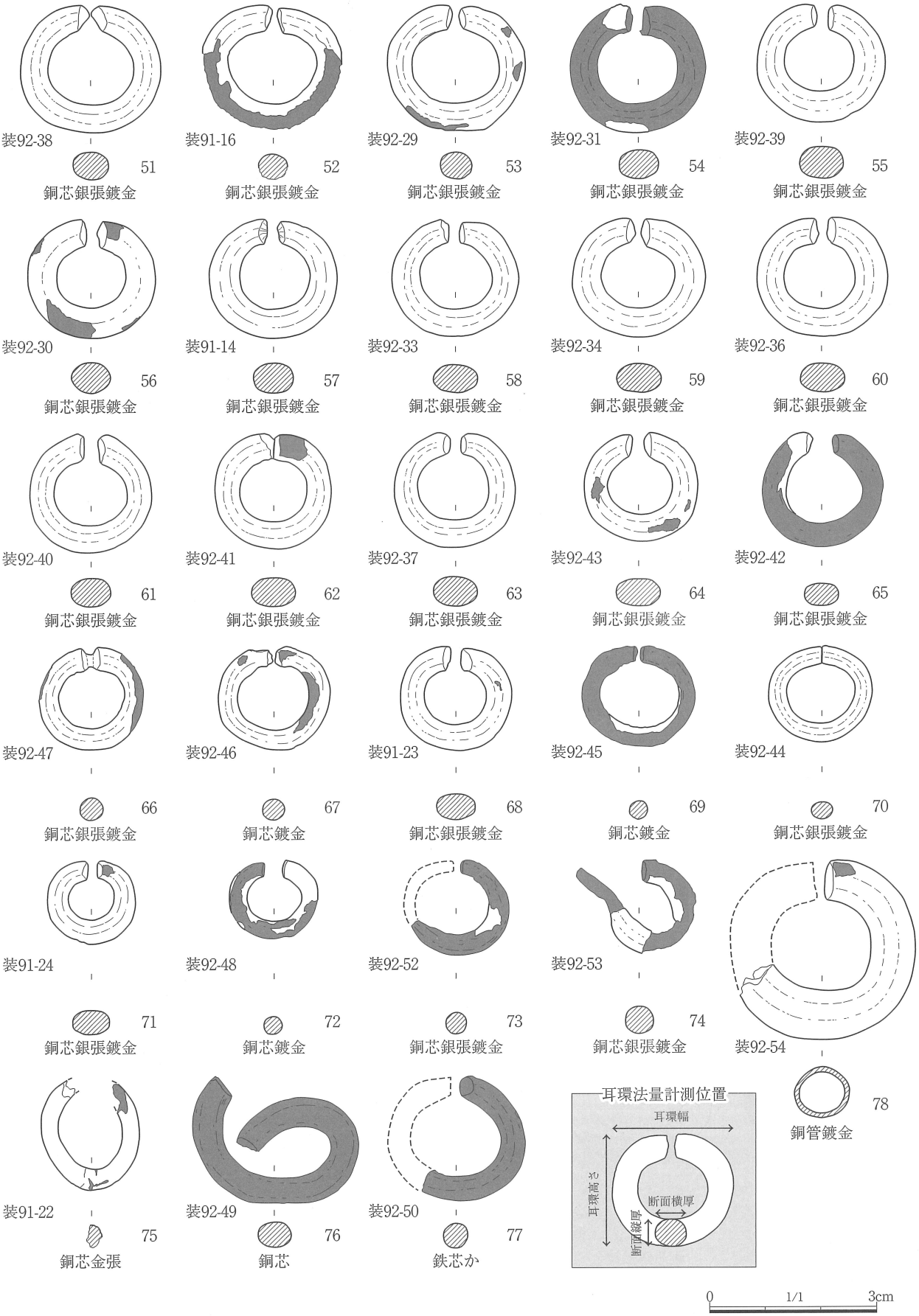
第３図　宮穴横穴群　全体図（1/600）



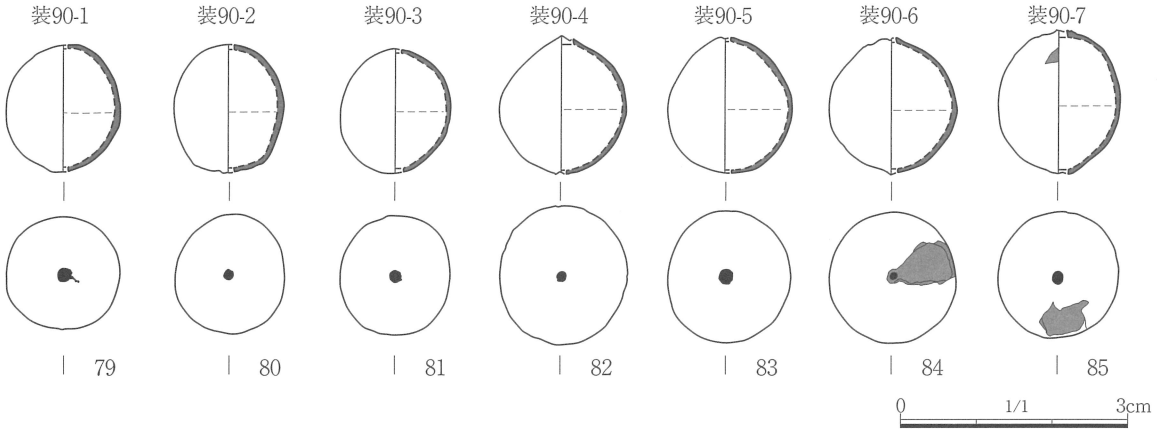
第４図　宮穴横穴群　出土品実測図（１）　耳環（1/1）



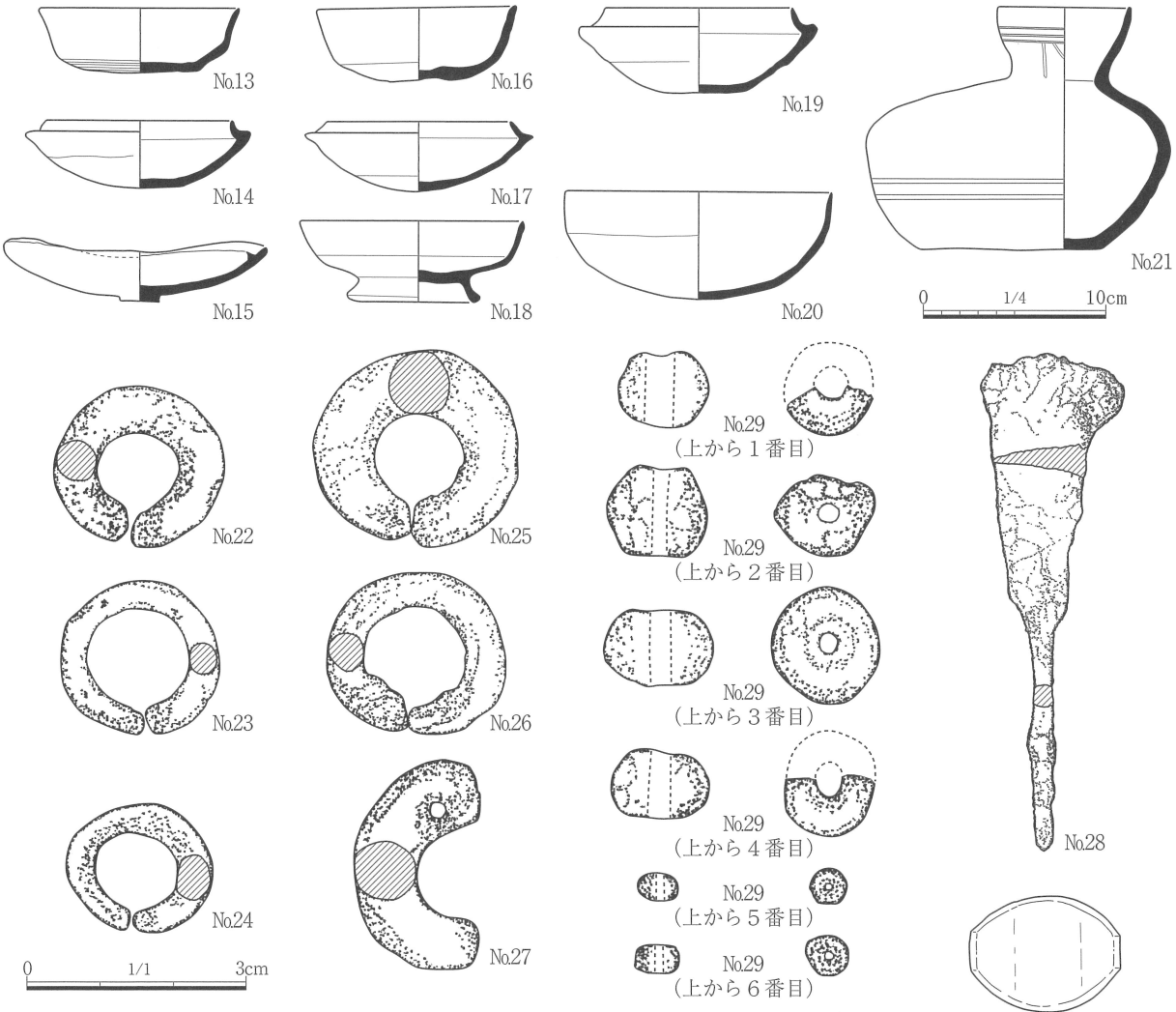
第 5 図　宮穴横穴群　出土品実測図（２）　耳環（1/1）



第６図　宮穴横穴群　出土品実測図（３）　耳環（1/1）

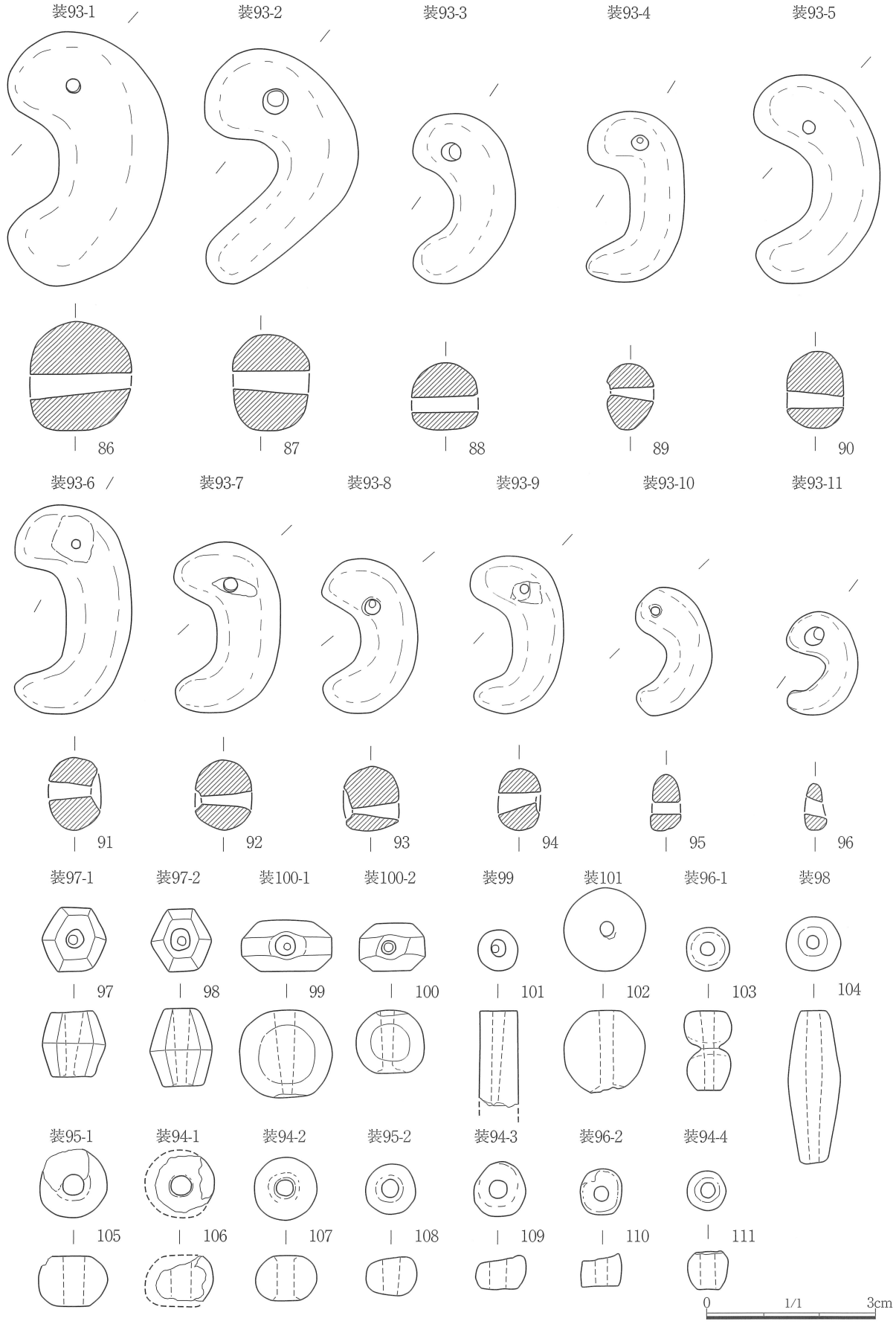


第７図　宮穴横穴群　出土品実測図（４）　空玉（1/1）



・本図の出土品は、第２回植木町総合調査で出土したものである。
・実測図№13から29は、註（３）の『玉高考古学部部報』31号より再トレースした。
・表面の点描表現部分は、スキャンしたものを貼り付けた。
・実測図断面部分は、一部斜線トーンに改変した。
・宮穴22号出土把頭は、註（４）の「熊本市宮穴22号墓出土把頭と関連資料」より再トレースした。
・縮尺は、土器が1/4、装身具が1/1、武器が1/2。

第８図　宮穴横穴群　出土品実測図（５）　土器・耳環・勾玉・小玉・鉄鏃・大刀（1/4、1/2、1/1）



第９図　宮穴横穴群　出土品実測図（６）　勾玉・切子玉・平玉・管玉・丸玉・連珠玉・棗玉・小玉（1/1）

第1表　宮穴横穴群　耳環一覧

管理No.	報告No.	種別	法量（重量がg以外はcm）				
			高	幅	縦厚	横厚	重量
装92 - 51	1	銀無垢	2	2	0.16	0.18	1.1
装91 - 21	2	銅芯金張	2.1	2	0.33	0.35	3.8
装91 - 19	3	銅芯金張	2.2	2.3	0.33	0.33	4.3
装91 - 17	4	銅芯金張	2.3	2.25	0.4	0.4	6.5
装91 - 18	5	銅芯金張	2.28	2.2	0.4	0.4	6
装92 - 32	6	銅芯金張	2.4	2.15	0.4	0.4	5.6
装91 - 20	7	銅芯金張	2.3	2.42	0.35	0.35	6.1
装91 - 5	8	銅芯金張	2.35	2.5	0.41	0.41	8.5
装91 - 11	9	銅芯金張	2.45	2.5	0.4	0.4	8.2
装91 - 13	10	銅芯金張	2.35	2.4	0.4	0.4	7.1
装91 - 6	11	銅芯金張	2.75	2.75	0.5	0.5	9.5
装91 - 12	12	銅芯金張	2.6	2.7	0.5	0.5	10
装91 - 10	13	銅芯金張	2.65	2.8	0.5	0.5	9.4
装92 - 35	14	銅芯銀張鍍金	2.2	2.4	0.4	0.45	7.3
装92 - 19	15	銅芯銀張鍍金	2.4	2.65	0.5	0.5	10.2
装91 - 1	16	銅芯金張	2.9	3.2	0.75	0.8	29.5
装91 - 2	17	銅芯金張	2.9	3.15	0.7	0.8	28.5
装92 - 2	18	銅芯銀張鍍金	3	3.3	0.78	0.8	24.1
装92 - 3	19	銅芯銀張鍍金	2.9	3.2	0.7	0.65	19.4
装92 - 1	20	銅芯銀張	3	3.35	0.8	0.7	20.7
装92 - 4	21	銅芯銀張鍍金	2.95	3.2	0.68	0.68	15.9
装92 - 5	22	銅芯銀張鍍金	2.9	3.1	0.7	0.8	23
装92 - 6	23	銅芯銀張鍍金	2.9	3.1	0.75	0.75	21.8
装92 - 10	24	銅芯銀張鍍金	2.85	3.15	0.78	0.8	24.9
装92 - 7	25	銅芯銀張鍍金	2.75	2.95	0.7	0.75	21
装92 - 11	26	銅芯銀張鍍金	2.75	3.1	0.65	0.7	19.3
装92 - 8	27	銅芯銀張鍍金	2.8	3.03	0.65	0.8	18.6
装92 - 9	28	銅芯銀張鍍金	2.6	3	0.6	0.8	18.4
装92 - 13	29	銅芯銀張鍍金	2.65	2.9	0.65	0.7	19
装92 - 14	30	銅芯銀張鍍金	2.7	2.9	0.65	0.8	16.8
装91 - 7	31	銅芯銀張鍍金	2.65	2.8	0.6	0.6	14.6
装91 - 8	32	銅芯銀張鍍金	2.65	2.8	0.6	0.55	14.5
装92 - 12	33	銅芯銀張鍍金	2.8	3	0.6	0.65	14.6
装92 - 15	34	銅芯銀張鍍金	2.75	2.9	0.63	0.65	15.6
装92 - 16	35	銅芯銀張鍍金	2.6	2.9	0.65	0.8	18.7
装92 - 21	36	錫芯か	2.65	2.9	0.58	0.65	9.6
装92 - 22	37	銅芯	2.5	2.8	0.6	0.6	14
装92 - 20	38	銅芯鍍金	2.55	2.75	0.7	0.7	18
装91 - 3	39	銅芯金張	2.55	2.8	0.65	0.7	20.9
装91 - 4	40	銅芯金張	2.4	2.55	0.6	0.8	18.2
装92 - 25	41	銅芯金張	2.4	2.55	0.6	0.85	18.5
装92 - 18	42	鉄芯錫張か	2.55	2.7	0.65	0.8	14.7
装92 - 17	43	銅芯銀張鍍金	2.5	2.7	0.6	0.78	18.3
装92 - 28	44	銅芯銀張鍍金	2.5	2.7	0.55	0.7	15
装92 - 24	45	銅芯銀張鍍金	2.45	2.6	0.55	0.8	17.5
装92 - 23	46	銅芯	2.5	2.7	0.55	0.7	15.5
装92 - 27	47	銅芯銀張鍍金	2.4	2.7	0.55	0.8	18.2
装91 - 15	48	銅芯銀張鍍金	2.45	2.55	0.58	0.62	11.8
装91 - 9	49	銅芯銀張鍍金	2.43	2.65	0.58	0.6	13.9
装92 - 26	50	銅芯銀張鍍金	2.4	2.45	0.63	0.75	14.4
装92 - 38	51	銅芯銀張鍍金	2.3	2.5	0.52	0.65	11.8
装91 - 16	52	銅芯銀張鍍金	2.2	2.6	0.45	0.52	7.1
装92 - 29	53	銅芯銀張鍍金	2.25	2.45	0.5	0.6	8.5
装92 - 31	54	銅芯銀張鍍金	2.3	2.4	0.53	0.75	15.7
装92 - 39	55	銅芯銀張鍍金	2.1	2.3	0.57	0.8	12.8
装92 - 30	56	銅芯銀張鍍金	2.15	2.3	0.57	0.7	12.6
装91 - 14	57	銅芯銀張鍍金	2.15	2.3	0.55	0.75	12.7
装92 - 33	58	銅芯銀張鍍金	2.1	2.3	0.5	0.8	11.8
装92 - 34	59	銅芯銀張鍍金	2.1	2.4	0.55	0.8	13
装92 - 36	60	銅芯銀張鍍金	2.15	2.35	0.53	0.8	13.8
装92 - 40	61	銅芯銀張鍍金	2.15	2.2	0.52	0.75	11.2
装92 - 41	62	銅芯銀張鍍金	2.05	2.1	0.52	0.8	12.8
装92 - 37	63	銅芯銀張鍍金	2.05	2.2	0.53	0.8	13.7
装92 - 43	64	銅芯銀張鍍金	1.95	1.9	0.5	0.8	11.1
装92 - 42	65	銅芯銀張鍍金	2.05	2.15	0.4	0.6	7.7
装92 - 47	66	銅芯銀張鍍金	1.85	1.9	0.4	0.4	4
装92 - 46	67	銅芯鍍金	1.85	2	0.39	0.4	3.7
装91 - 23	68	銅芯銀張鍍金	1.85	2	0.48	0.7	9.3
装92 - 45	69	銅芯鍍金	1.8	2	0.35	0.35	2
装92 - 44	70	銅芯銀張鍍金	1.72	1.85	0.32	0.4	3.8
装91 - 24	71	銅芯銀張鍍金	1.5	1.6	0.45	0.65	5.7
装92 - 48	72	銅芯鍍金	1.4	1.6	0.33	0.35	2.5
装92 - 52	73	銅芯銀張鍍金	1.7	1.9	0.38	0.38	2.1
装92 - 53	74	銅芯銀張鍍金	1.65	2.15	0.5	0.5	3.8
装91 - 22	75	銅芯金張	2	1.8	0.4	0.3	2.7
装92 - 49	76	銅芯	2.25	3	0.45	0.6	14.6
装92 - 50	77	鉄芯か	2.25	2.5	0.43	0.45	4.3
装92 - 54	78	銅管鍍金	3.25	3.3	0.9	0.98	5.2

3　宮穴横穴群出土の耳環

（1）分析の視点

宮穴横穴群の耳環は、出土状況が明らかでなく、共伴する遺物も不明なため、その位置づけが難しい。ここでは、耳環の研究史を概観し、ほかの遺跡より出土した耳環との法量、材質、製作技法の比較検討から、宮穴出土耳環の年代的・階層的位置づけと派生する問題について考察する。分析の前提として、錫や鉛製、断面多角形や芯が捩れた耳環などの特殊な例や北部九州に多い細型の金無垢耳環を除けば、銅芯耳環や中空耳環は基本的に地域性がないと判断した。その理由としては、断面楕円形や中空耳環の分布に地域的な偏在がないこと、各時期で地域を越えて大きさが同様であることが挙げられる。

（2）耳環の年代研究略史

耳環の研究は、明治時代における用途にかんする論争が早いものであるが、本稿では宮穴横穴群出土耳環を位置づけるため、主として年代についての研究史を整理する。まず、耳環の年代的位置づけは、菅谷文則(6)の研究に始まる。菅谷は文中で編年はできないと断りつつも、耳環の初現を6世紀初頭、終末を6世紀末から7世紀初頭と考え、針金式の金・銀無垢が垂飾付と並行し、金無垢がやや古く、中空は6世紀後半を中心とするものとした。中空耳環を分析した小池寛(7)は、それらが6世紀後半に多く、7世紀代に激減することを指摘し、このことは耳環全般にみられる現象としている。耳環の変遷を図で示した松本百合子(8)は、銅芯金・銀張耳環は6世紀前半から後半に多いこと、断面楕円形のものに6世紀前半まで遡る例はないこと、中空耳環は6世紀末から7世紀前半に限定して現れること、耳環が金・銀無垢から銅芯金・銀張、そして中空へと変化することを述べた。

耳環の大きさなどを比較研究した辻村純代(9)は、6世紀中葉に大型太環が出現すると同時に生産量が飛躍的に増大すること、7世紀に中実だけでなく中空耳環にも小型化傾向が現れて、中実耳環の断面楕円化が顕著となることを指摘した。兵庫県東山古墳群出土耳環を分析した野口成美(10)は、小型で断面楕円形の耳環が、大型で断面円形の耳環より新しいという、松本や辻村の考えと同様の見解を示した。野口と同じく東山古墳群出土耳環を分析した村上隆(11)は、6世紀末から7世紀中葉の耳環について、中実から中空、大から小、断面太から細、断面円から楕円と変遷し、開き部の特徴や表面被覆材にも時代的変遷がある可能性を示した。日本と韓国の耳環を調査した西山めぐみ(12)によれば、日韓両地域とも銅芯金張に比べて無垢の細い金・銀無垢耳環の使用は古く、銅芯銀張鍍金などの鍍金製品は、無垢に若干遅れて増加するとのことである。中空耳環出現の要因については、垂飾付耳飾の垂下飾や飾履が大型化するのと同時に、耳環も太型化し、その太型化に対応して材料節約や重量削減のためと考えた。大阪府一須賀古墳群出土耳環を分析した渡辺智恵美(13)は、無垢耳環が鍍金耳環に、金箔貼耳環が鍍金耳環にそれぞれ先行し、蛍光x線分析の結果、新たに銀無垢鍍金耳環を確認したとする。

（3）耳環の変遷

宮穴横穴群出土耳環の位置づけをおこなう前に、各時期の遺跡から出土する耳環について述べ、耳環の変遷概要を記す。資料の選定にあたっては、可能な限り一括性の高いものを選び、古墳であれば直葬や単葬で須恵器をともなっていること、古墳以外の遺跡出土であれば寺院塔心礎周辺出土のものを重視した。

耳環は、基本的に装身具であり、作られた年代と使われなくなる年代の間には、当然一定の期間が存在する。そのため、ある形状・法量の耳環製作年代を推定する場合には、同様の耳環を出土した遺跡のなかでももっとも古い遺跡の年代が、製作時期を表している可能性が高い。各時期に作られた耳環は、着装した人の寿命や着装開始した年齢と関係し、須恵器でいえば3型式期、1型式期を約四半世紀とした場合は、約75年が存続年代の限界となり、実際4型式期以上にまたがるものは存在しない。そのことは、6世紀末の推古元年（593）に埋納された奈良県飛鳥寺塔心礎出土耳環群と、7世紀第3四半期頃の奈良県尼寺廃寺北廃寺塔心礎出土耳環群の幅や太さといった様相が、重ならないことからも裏づけられる。本稿では、そのような理解のもとで、TK23・47型式期【5C4/4】(14)から飛鳥Ⅲ期【7C3/4】(15)までの耳環について記述を進めていく。研究略史で列挙した先行研究との相違は、変遷を記したあとに述べる。

TK23・47 型式期【5C4/4】 幅約 1.5 cm 以下、断面径約 0.15 から 0.3 cm の耳環が主体となる時期である。金無垢・銀無垢のものが多い。この時期の耳環を出土した古墳には、大阪府高井田山古墳、大阪府一須賀Ⅰ 12 号墳などがある。

MT15 型式期【6C1/4】 幅約 1.5 から 1.7 cm、断面径約 0.15 から 0.25 cm の耳環が主体となる時期である。前代と同様に金無垢・銀無垢のものが多い。この時期の耳環を出土した古墳としては、群馬県前二子古墳、奈良県新沢千塚 323 号墳などがある。

TK10 型式期【6C2/4】 幅約 1.7 から 2 cm、断面径約 0.15 から 0.25 cm の耳環が主体となり、前代よりも耳環が全体的に大きくなる時期である。無垢以外に銀芯鍍金や銅芯鍍金もある。この時期の耳環を出土した古墳としては、京都府井ノ内稲荷塚古墳、京都府長法寺七ツ塚 4 号墳 1 号埋葬施設などがある。

MT85 型式期【6C3/4】 幅約 2 から 2.8 cm、断面径約 0.3 から 0.5 cm の耳環が主体となり、前代よりもさらに耳環が大きくなる時期である。無垢に加え銅芯金・銀張もあるが、とくに銅芯金張が多くなっている。この時期の耳環を出土した古墳としては、京都府物集女車塚古墳、大阪府梶原 F1 号墳などがある。

TK43 型式期【6C4/4】 幅約 3 cm 以上、断面径約 0.6 cm 以上の耳環が主体となる時期で、この時期に耳環の大きさは最大となる。しかし、6 世紀末頃には耳環の縮小化が始まっていることが、飛鳥寺塔心礎出土品(16)の様相より明らかである。断面楕円形耳環や中空耳環はこの時期に出現するが、その数は断面円形耳環や中実耳環に比べて大変少ない。銅芯金・銀張が多く、無垢は前代より少なくなっている。この時期の耳環を出土した古墳としては、奈良県藤ノ木古墳や奈良県三ツ塚 11 号墳などがある。

飛鳥Ⅰ期（古相）【7C1/4】 幅約 2.4 から 2.7 cm、断面径約 0.5 から 0.8 cm のものが主体となる時期である。前代よりも大きさが縮小している。断面楕円形耳環の割合が前代よりもやや増える。前代同様、銅芯金・銀張は多いが、無垢は少ない。この時期の耳環を出土した古墳としては、奈良県ハミ塚古墳、奈良県寺口忍海 H29 号墳などがある。

飛鳥Ⅰ期（新相）【7C2/4】 幅約 2 から 2.4 cm、断面径約 0.5 から 0.8 cm のものが主体となる時期である。前代よりもさらに大きさが縮小している。断面楕円形耳環の割合が前代よりも増える。銅芯銀張鍍金や銅芯鍍金が多い。この時期の耳環を出土した古墳としては、大阪府雁多尾畑 49 支群 3 号墳、奈良県大正池南 1 号墳などがある。また、古墳ではないが、大阪府四天王寺塔心礎からは、幅約 2.3 cm の中空金管耳環 2 点(17)が出土し、四天王寺の瓦を焼いた大阪府平野山瓦窯跡からは、飛鳥Ⅰ期（新相）の須恵器が出土している。それらのことを合わせると、塔が他の施設よりも遅れて建造される場合もあったかと考えられるが、四天王寺塔心礎出土耳環は、飛鳥Ⅰ期（新相）頃のものと捉えてよかろう。

飛鳥Ⅱ・Ⅲ期【7C3/4】 幅約 2 cm 以下、断面径約 0.4 から 0.6 cm のものが主体となり、耳環がより小さくなる時期である。断面楕円形のものが多く、断面径の小さいものは断面円形が多い。銅芯銀張鍍金や銅芯鍍金が多い。中空耳環では、端部を折り込んで閉じるものから、蓋の上から折り込む形状に変化する。幅 1.5 cm、断面径 0.4 cm 程度の耳環は、飛鳥Ⅱ期築造の単葬墳で出土していないことから、ここで飛鳥Ⅱ期とⅢ期のものを分けられる可能性もある。この時期の耳環を出土した古墳としては、奈良県舞谷 4 号墳、大阪府雁多尾畑 49 支群 4 号墳などがある。また、古墳ではないが、7 世紀第 3 四半期頃創建の奈良県尼寺廃寺北廃寺塔心礎からは、銅芯金張 9 点・金管 3 点が出土しており、金管はいずれも幅 2 cm 以下、断面径 0.5 cm 以下のものである。飛鳥Ⅳ期以降製作と考えられる耳環は、管見のかぎり確認できない。

研究史との関係 上述の変遷観については、すでに研究史で述べられていることも多い。菅谷が説く無垢耳環よりも中空耳環が新しいこと、松本が述べる断面楕円形のものが新しい耳環に多いこと、辻村が述べる 7 世紀に中実だけでなく中空耳環も小型化することなどである。ただし、年代観の微細な部分では異なる見解もある。例えば、辻村が 6 世紀中葉出現とする大型太環は 6 世紀第 4 四半期出現とし、村上が 6 世紀末から 7 世紀中葉に中実から中空、断面円から楕円への変化を想定したことについては、辻村も述べているように中実と中空は並存し、また断面円と楕円形も並存していると考えた。耳環の終焉を 7 世紀のこととする意見は、研究史でほぼ共通のものとなっていたが、本稿では飛鳥Ⅳ期頃と位置づけておく。

（4）宮穴横穴群出土耳環の位置づけ

耳環の変遷を概観することで、各時期の耳環は素材・製作技法・法量によって、一定のまとまりがあることが明らかとなった。とくに法量は、各時期で銅芯金張と銅管鍍金というように素材と製作技法が異なっていてもほぼ同様に変化していく。したがって、耳環は法量に限れば、素材と製作技法ごとに異なる型式の変化が別々に進行していくというよりも、各時期の流行に則して様式的に変化していくようである。上述の変遷観にもとづいて、宮穴横穴群出土耳環をみてみよう（第10図）(18)。

耳環の時期　古いものではTK10型式期【6C2/4】の銀無垢1点がある。復元幅約2cm、断面径0.16から0.18cmである。続くMT85型式期【6C3/4】の耳環では、銅芯金張13点、銅芯銀張鍍金2点がある。幅2.2から2.8cm、断面径0.33から0.5cmで、断面円形耳環のみである。TK43型式期【6C4/4】には、銅芯金張2点、銅芯銀張鍍金17点、銅芯銀張・銅管鍍金・銅芯・錫芯各1点がある。幅2.8から3.35cm、断面径0.55から0.98cmで、27・28などのように断面楕円形もあるが、ほぼ断面円形である。飛鳥Ⅰ期（古相）【7C1/4】には、銅芯金張3点、銅芯銀張鍍金9点、銅芯鍍金・鉄芯錫張・銅芯各1点がある。幅2.45から2.8cm、断面径0.45から0.85cmで、断面円形よりも断面楕円形が多くなっている。飛鳥Ⅰ期（新相）【7C2/4】には、銅芯銀張鍍金12点がある。幅1.9から2.45cm、断面径0.5から0.8cmで、ほぼ断面楕円形である。飛鳥Ⅱ・Ⅲ期【7C3/4】には、銅芯銀張鍍金5点、銅芯鍍金3点がある。幅1.6から2.15cm、断面径0.32から0.7cmで、断面円形と断面楕円形がある。

耳環の変化　時期ごとに宮穴横穴群出土耳環の変化をみると、法量以外に貴金属の使用割合が次第に減少していることに気がつく。6世紀第2四半期は銀無垢であったものが、第3四半期には銅芯金張が多くなり、第4四半期には銅芯金張よりも銅芯銀張が多くなる。7世紀第1四半期に銅芯銀張が多いことは、前代と同様であるが、6世紀末頃からの縮小化が続き、銅芯鍍金のものもある。7世紀第2、3四半期も縮小化は続き、銅芯金張はみられなくなり、銅芯鍍金の割合が増加する。

（5）耳環からみる宮穴横穴群の階層性

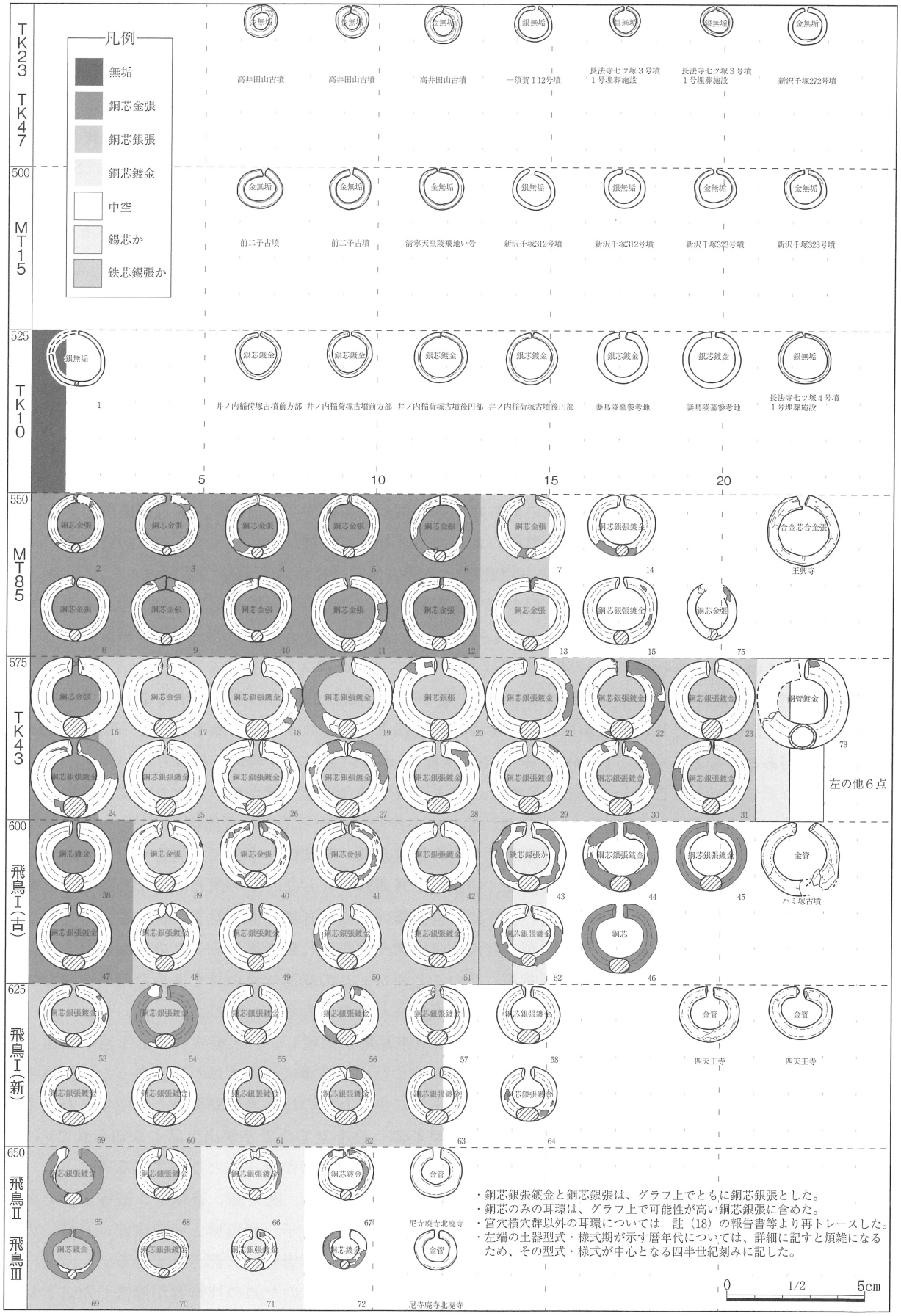
宮穴横穴群出土耳環の位置づけにより、それらが6世紀第2半期から7世紀第3四半期頃のものであること、貴金属の使用割合が減少していくことが明らかとなった。各時期の耳環の様相から、宮穴横穴群全体の階層性はどのように表れてくるのか、各時期の単独墳・塔心礎と群集墳の資料を比較してみたい。

まず、宮穴横穴群には6世紀第2半期頃の銀無垢耳環があるが、この時期には銀無垢のほかに単独墳である井ノ内稲荷塚古墳出土耳環のように銀芯鍍金のものなどがある。つぎに、宮穴横穴群出土の6世紀第3四半期から7世紀第3四半期の耳環は、鉄芯・錫芯の可能性があるものを除き、芯材や管材に銅を用いている。

単独墳の耳環　単独墳や塔心礎では、6世紀第3四半期の綿貫観音山古墳出土銀無垢耳環、6世紀第4四半期の綿貫観音山古墳出土銀管耳環や藤ノ木古墳出土銀芯金張耳環、7世紀第1四半期のハミ塚古墳出土金管耳環、7世紀第2四半期の四天王寺塔心礎出土金管耳環、7世紀第3四半期の尼寺廃寺北廃寺塔心礎出土金管耳環や舞谷4号墳出土銀芯金張耳環などがあり、上記のものは芯材や管材に金や銀を用いている。

群集墳の耳環　群集墳では、6世紀第3四半期の大阪府梶原F1号墳出土銅芯耳環、6世紀第4四半期の奈良県石光山40号墳埋葬施設1出土銅芯銀張耳環、7世紀第1四半期の兵庫県東山15号墳出土銅芯耳環と銅管耳環、7世紀第2四半期の京都府旭山E7号墳出土銅芯耳環、7世紀第3四半期の大阪府雁多尾畑49支群4号墳出土銅芯耳環などがあり、上記のものは芯材や管材に銅を用いている。

耳環の階層性　このように記すと、単独墳や塔心礎の耳環では金や銀だけを使用していて、群集墳では芯材や管材に銅しか使用していないかのようであるが、実際には単独墳や塔心礎からも銅芯耳環は出土し、群集墳からも主として6世紀前半までは金・銀製の耳環が出土することもある。そのため、金・銀・銅の使用割合によって、絶対的な階層性が表されるとは必ずしもいえないものの、貴金属の出現頻度からみた場合、単独墳被葬者や寺院建立者の方が、群集墳被葬者よりも相対的に高い階層にあるとしても、そのことについては大過ないと思われる。耳環は、各時期で素材と製作技法が異なっていてもほぼ同様の形状であることから、現代の金属製装身具のように、使用金属によってその貴賤が示されていると考えられる。



第10図　宮穴横穴群　耳環の変遷

宮穴の階層性　その場合、宮穴横穴群出土耳環は、6世紀第3四半期以降、錫や鉄といった特殊なものを除くと銅を芯材や管材に使用したものであることから、宮穴横穴群の被葬者は、上記の単独墳被葬者や寺院建立者に比べて、各時期を通じて相対的に低い階層的位置にあった可能性が高いと判断できる。ただし、銅芯の耳環であっても、金張・銀張・銀張鍍金・鍍金など表装技法によって細分されるため、このことも耳環の階層性を表すものと思われる。また、7世紀第3四半期には古墳が全体的に縮小し、群集墳被葬者であっても寺院建立者の可能性があるものも存在する。一例として、大阪府田辺17号墳からは、幅1.58 cm、断面径0.31 cmの金管耳環（一部銅か）が出土していて、尼寺廃寺北廃寺塔心礎からも金管耳環が出土している。田辺古墳群の被葬者には、田辺廃寺の建立者とされる「田辺史」氏をあてる花田勝広の説[19]もあって、寺院を建立可能な氏族以上の者が金管耳環を入手可能だったとも考えられる。

（6）宮穴横穴群出土耳環の製作技法

宮穴横穴群の耳環を整理するにあたって苦心したのは、それらの製作技法について、銅芯金張や銀張のものに比べて、肉眼観察では鍍金膜なのか金箔なのか、にわかに判断しがたいものがあったことである。ここでは、そうした宮穴横穴群出土耳環の製作技法にかんして、検討の結果気づいた点を述べる。

消鍍金と箔鍍金　鍍金技法について、奈良県飛鳥寺銅造釈迦如来坐像の鍍金は、金箔と水銀を用いる箔鍍金ではなくアマルガム法による消鍍金と推定されることが、平成24年の大橋一章・櫻庭裕介らによる調査[20]の結果、明らかとなった。また、藤ノ木古墳の鍍金製品は、鍍金膜が厚いもので部分的に20 μmあり、一般的な箔より厚いものもある[21]。7世紀の飛鳥寺銅造釈迦如来坐像や8世紀の東大寺銅造盧舎那仏坐像にも消鍍金技法が用いられていて、藤ノ木古墳例のように箔よりも厚い鍍金膜も存在することから、この時期にはまだ箔鍍金技法はなく、大阪府一須賀古墳群出土耳環の分析で、渡辺智恵美が箔鍍金とした耳環[22]については、消鍍金のものと考えておく。上記のような理解により、宮穴横穴群出土耳環のうち、表面にきわめて薄い金が残る資料は、消鍍金によるものとした。なお、金の貼付技術について、小林行雄は奈良時代に膠が用いられていたことを指摘し[23]、辻村純代は漆が耳環芯部への接着剤の役目を果たしたとする[24]。

芯材中央の空洞　宮穴横穴群出土耳環のなかに、芯材中央の比重が低いものが存在することはすでに述べた。渡辺智恵美が分析した耳環のなかには、芯材中央に空洞をもつものがあり、参考になる[25]。そのほか、芯材に空洞があるものとしては、西山めぐみ[26]や村上隆[27]が細い金無垢耳環例を報告していて、それぞれ薄い金を巻いてつくったと推定している。X線などによる科学的な調査で確かめられたものではないが、奈良県仏塚古墳の銅芯耳環[28]は開口部に穴があり、芯材中央が空洞になっている可能性がある。

そうした他の例から、宮穴横穴群における芯材中央の比重が低い耳環は、中央に空洞をもつものと考えておきたい。芯材に空洞をもつ耳環の製作技法は、切断して断面観察などをしない限り詳細を知ることは難しい。西山や村上が検討した細い金無垢耳環のように、宮穴横穴群出土耳環も薄い材を幾重にも巻いて、芯材を作出したことも考慮しなければならないが、宮穴とは形状や材が金と銅で異なることのほか、宮穴には中央の空洞断面が丸ではなく不定形のものもある。そのことから、この空洞は薄い材を丸めた際の空隙ないし芯材を作出した際の空隙が、材を引抜板で絞ったあとも残ったものとも考えられる。

中空耳環の技法　日本（倭）では6世紀第4四半期に中空耳環が出現し、宮穴横穴群でも1点が出土している。中空耳環は中実耳環と製作技術が明らかに異なり、これまで系譜については不明であった。国外の例では、韓国（百済）の王興寺塔心礎出土品中に耳環があり、中実耳環のほか素地が腐食して中空となった耳環も出土している[29]。百済の王興寺は、西暦577年に塔心礎へ柱を立てたことが出土品より知られていて、倭の飛鳥寺造営にあたり、その影響が大きかったことは、多くの研究者が考えるところである[30]。

敏達6年（577）11月、百済の威徳王は、経論と律師、禅師、比丘尼、呪禁師、造仏工、造寺工の6名を倭に送り、崇峻元年（587）、同じく威徳王は、寺工の太良未太・文賈古子、鑪盤博士の白昧淳、瓦博士の麻奈文奴・陽貴文・悒貴文・昔麻帝弥、画工の白加を倭に送ったと『日本書紀』に記されている。

同書の記述により、6世紀第4四半期には、百済から倭へ造寺・造仏のための技術者が渡来したことは確実であり、造仏工や鑪盤博士の名から、新たな金工技術もこの時期にもたらされた可能性が高い。製作当初

から中空だったかは不明であるが、王興寺より素地が腐食して中空となった耳環が出土していること、百済より金工にかんする技術者の渡来があったこと、飛鳥寺塔心礎から百済に多い捩れた耳環が出土していること、倭の中空耳環は6世紀第4四半期より出現することから、倭における中空耳環の出現については、百済より渡来した技術や思想が関係していると考えておきたい。

（7）耳環の終末

耳環を出土した新しい時期の遺跡としては、大阪府雁多尾畑49支群10号墳（墓）があり、飛鳥Ⅳ期の須恵器を出土している(31)。同墳（墓）の耳環は銅芯金張で、直径約2cm、断面径0.46cmの飛鳥Ⅱ期頃のものである。耳環は宮穴横穴群などの検討から、飛鳥Ⅲ期までの変遷を確かめられるが、飛鳥Ⅳ期以降のものは確認できない。飛鳥Ⅳ期はほぼ天武朝と対応する時期であり、この時期に耳環がなくなることの意味について、『日本書紀』の推古紀・天武紀にある装身関連の記述と出土資料を比較しながら考える。

推古紀と出土資料　推古11年（604）12月には、いわゆる冠位十二階が制定され、同12年1月に初めて冠位が諸臣に賜与されたことが記されている。同13年閏7月には諸王・諸臣に褶を着るよう命が出され、同16年8月には皇子・諸王・諸臣が頭に金の髻花(32)を着け、錦などを用いた服を着用しているが、同19年5月には髻花の素材を冠位ごとに変え、服の色を冠の色に合わせるようにしている。この時期の変化を出土資料からみた場合、衣服は残っていないため不明であるが、冠などの金属製装身具は明らかとなっている。すなわち、推古朝以前のTK43型式期まで多かった金銅製の広帯冠や飾履が、冠位十二階が制定された推古朝の飛鳥Ⅰ期（古相）以降なくなるのである。

天武紀と出土資料　天武朝に進められたのは、衣服や装身の倭風から唐風への変化である。天武5年（676）1月には、限られた大夫等に衣・袴・褶・腰帯・脚帯・机・杖が賜与され、同10年4月の禁式九十二条では位に応じて服装の素材を変えるように定められたが、同11年3月には百寮の諸人に対して今度は冠・褌・褶・脛裳の着用を禁じている。服装だけでなく髪型についても変更がある。同11年4月には男女に髪結するよう命が出され、同年6月には男子が初めて髪結し、漆紗冠を着けている。同13年閏4月には、女子のみ髪結の規制が緩められ、男女の服装について襴の有無や結紐・長紐の着用は任意となり、同14年7月には朝服の色が定められた。この時期の変化を出土資料からみた場合、推古紀の場合と同じく衣服は不明であるが、頭部の装飾は明らかとなっている。先述のとおり、飛鳥Ⅲ期までみられた耳環が、天武朝の飛鳥Ⅳ期以降ほぼ着けられなくなる。

装身の画期　推古紀・天武紀の記述と出土資料の比較からは、装身上の画期がみえてくる。まず、推古朝の冠位十二階制定と、この時期に金銅製広帯冠がなくなることは、明らかに相関する事象と考えられ、7世紀前半における装身上の画期といえる。つぎに、天武朝における装身の変遷については、廣瀬圭(33)と武田佐知子(34)の研究に詳しい。武田が述べる朝服制定の重要性は、先述のように推古朝以降多くの変更、紆余曲折を経て辿りついたもので、この段階で官人の髪型・冠・服が推古朝とは異なるものとなっていることからも疑いない。天武朝は、倭風から唐風へと官人の服装が変化し、髪型の変更をともない、この時期の唐には耳環を着ける風習もない。ゆえに、5世紀から続いた耳環の消滅は、天武朝の唐風化政策の一環として、衣服や装身が一変したことと軌を一にする現象と考えられ、7世紀後半における装身上の画期である。

まとめ

宮穴横穴群出土遺物の概要報告と出土耳環の考察をおこなった。その結果、出土遺物全体の概要を示し、宮内庁書陵部陵墓課と九州国立博物館の共同研究成果の一部を紹介することができた。また、耳環の検討では、それらの年代的・階層的位置づけを明らかにし、製作技法などの問題についても若干の考察を試みた。ただし、材質や製作技法の詳細は、肉眼観察では限界があることから、蛍光X線などによる理化学的分析を実施して、本稿での観察結果を検証していくことが必要である。耳環の位置づけでは、研究史の整理後に分類・編年案を示すべきだが、年代の概要を示すにとどまった。研究史の整理と分類・編年案は、別稿で論じることとし、一部の論文や報告書しか挙げることができなかった点については、ご寛怒願いたい。

註

（1） 植木町史編纂委員会編『植木町史』植木町、1981年。

（2） 『諸陵寮公文書類件名録』1（宮内公文書館所蔵、識別番号：40073）。

（3） 熊本県立玉名高等学校考古学部編『玉高考古学部部報』31号、1974年。

註（3）を含む文献収集にあたっては、熊本市教育委員会の三好栄太郎氏に尽力して頂いた。記して感謝申し上げる。

（4） 豊島直博「熊本市宮穴22号墓出土把頭と関連資料」『熊本古墳研究』第6号、熊本古墳研究会、2015年。

（5） 高木正文「宮穴横穴墓群」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県教育委員会、1984年。

（6） 菅谷文則「古墳時代の耳飾について」『古代国家の形成と展開』大阪歴史学会、1976年。

（7） 小池　寛「中空耳環について」『京都府埋蔵文化財論集』第1集、京都府埋蔵文化財調査研究センター、1987年。

（8） 松本百合子「耳飾」『古墳時代の研究』第8巻古墳Ⅱ副葬品、雄山閣出版、1991年。

（9） 辻村純代「耳環考」『古文化談叢』第39集、九州古文化研究会、1997年。

（10） 野口成美「東山古墳群出土耳環の特徴」『東山古墳群』Ⅰ、中町教育委員会、1999年。

（11） 村上　隆「東山古墳群から出土した耳環の分類と分析」『東山古墳群』Ⅱ、中町教育委員会、2001年。

（12） 西山めぐみ「金工技術からみた日韓交渉」『人類史研究』第13号、人類史研究会、2002年。

（13） 渡辺智恵美「一須賀古墳群出土耳環の自然科学的調査」『大阪府立近つ飛鳥博物館館報』16、2012年。

（14） 田辺昭三『須恵器大成』角川書店、1981年。

（15） 西　弘海『土器様式の成立とその背景』真陽社、1986年。

（16） 石橋茂登・諫早直人・降幡順子「飛鳥寺塔心礎出土耳環」『奈良文化財研究所紀要』2017、2017年。

（17） 四天王寺塔心礎出土耳環の調査・掲載にあたっては、四天王寺より許可を頂いた。記して感謝申し上げる。

（18） 第10図の作成にあたっては、下記報告書等掲載の実測図を再トレースした。

日本：大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団編『井ノ内稲荷塚古墳の研究』、2005年。大阪府教育委員会編『一須賀古墳群Ⅰ支群発掘調査概要』、1993年。香芝市二上山博物館編『尼寺廃寺』Ⅰ、2003年。柏原市教育委員会編『高井田山古墳』、1996年。清喜裕二・横田真吾・土屋隆史「妻鳥陵墓参考地墳丘外形調査および出土品調査報告」『書陵部紀要』第68号〔陵墓篇〕、2017年。徳田誠志「清寧天皇河内坂門原陵飛地い号境界線保護工事予定区域の事前調査」『書陵部紀要』第52号、2001年。奈良県立橿原考古学研究所編『新沢千塚古墳群』、1981年。同編『ハミ塚古墳』、2003年。前橋市教育委員会文化財保護課編『前二子古墳』、1993年。韓国：國立扶餘文化財研究所編『王興寺址』Ⅲ、2009年。

（19） 花田勝広「田辺史氏と氏墓をめぐって」『田辺古墳群・墳墓群発掘調査概要』柏原市古文化研究会、1987年。

（20） 櫻庭裕介「飛鳥寺本尊丈六釈迦如来坐像について」『奈良美術研究』第14号、早稲田大学奈良美術研究所、2013年。

（21） 久野雄一郎「金銅製・銀製資料の分析」『斑鳩藤ノ木古墳　第二・三次調査報告書』奈良県立橿原考古学研究所、1993年。

（22） 註（13）に同じ。

（23） 小林行雄「金銀」『古代の技術』塙書房、1962年。

（24） 註（9）に同じ。

（25） 渡辺智恵美『科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書』、2012年。

（26） 西山めぐみ「古墳時代耳環考」『古文化談叢』第44集、九州古文化研究会、2000年。

（27） 村上　隆「古墳時代の金・銀製耳環の材質と製作技法をめぐる考察」『奈良文化財研究所紀要』2002、2002年。

（28） 奈良県立橿原考古学研究所編『斑鳩・仏塚古墳』斑鳩町教育委員会、1977年。

（29） 王興寺塔心礎出土耳環の掲載にあたっては、國立扶餘文化財研究所より許可を頂いた。記して感謝申し上げる。

なお、上記許可申請では、慎イスル氏、中久保辰夫氏にお世話になった。記して感謝申し上げる。

（30） 鈴木靖民「百済・王興寺と飛鳥寺の創建」『古代日本の東アジア交流史』勉誠出版、2016年（2008年初出）。など。

（31） 柏原市教育委員会編『平尾山古墳群―雁多尾畑49支群発掘調査概要報告書―』、1989年。

（32） 髻花は、大阪府ツカマリ古墳、阿武山古墳等出土の金を螺旋状に捩り、棒状にしたものがそれに該当する可能性がある。

（33） 廣瀬　圭「古代服制の基礎的考察」『日本歴史』第356号、日本歴史学会、1978年。

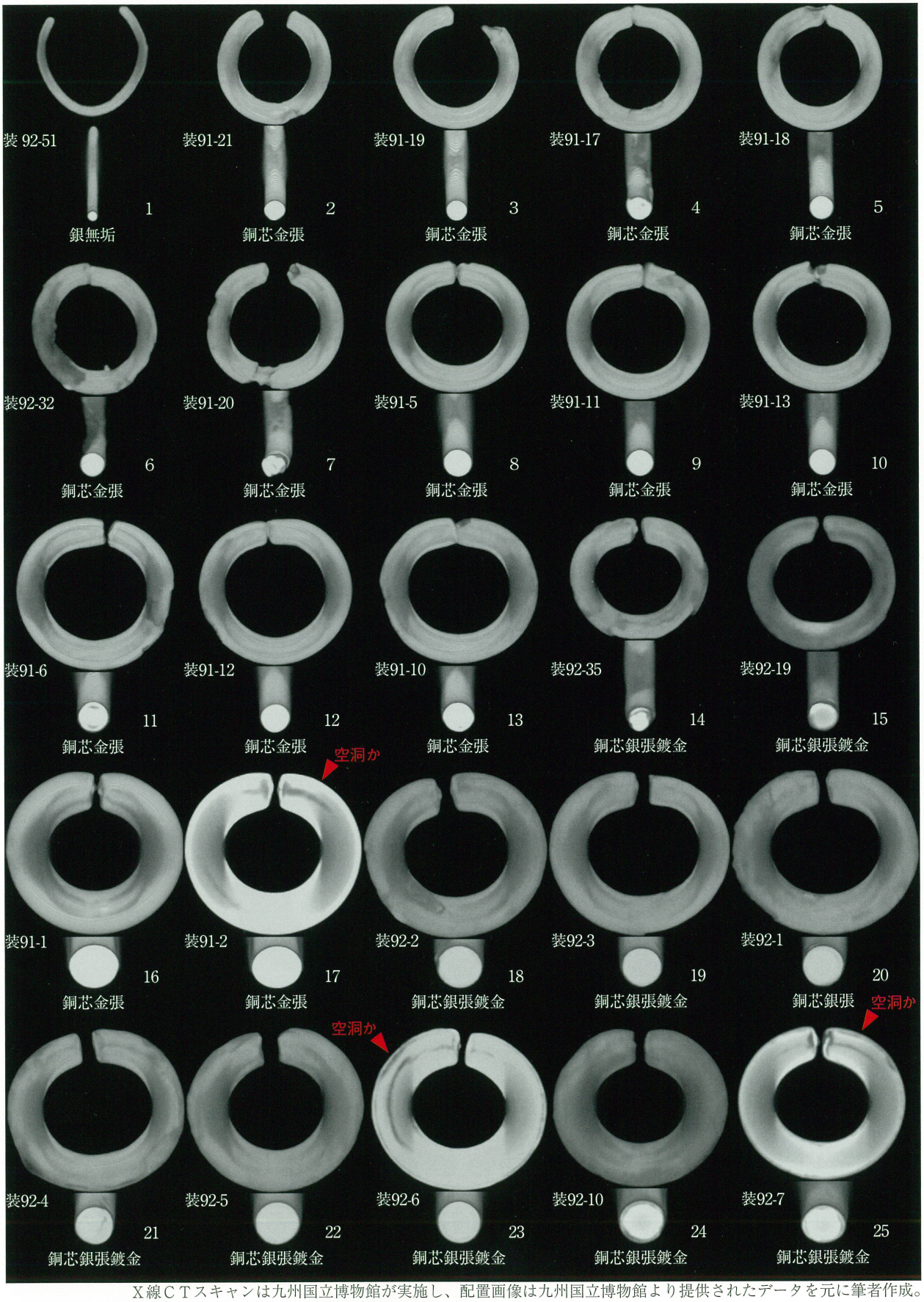
（34） 武田佐知子「日本衣服令の成立」『古代国家の形成と衣服制』吉川弘文館、1984年。



撮影　佐藤右文

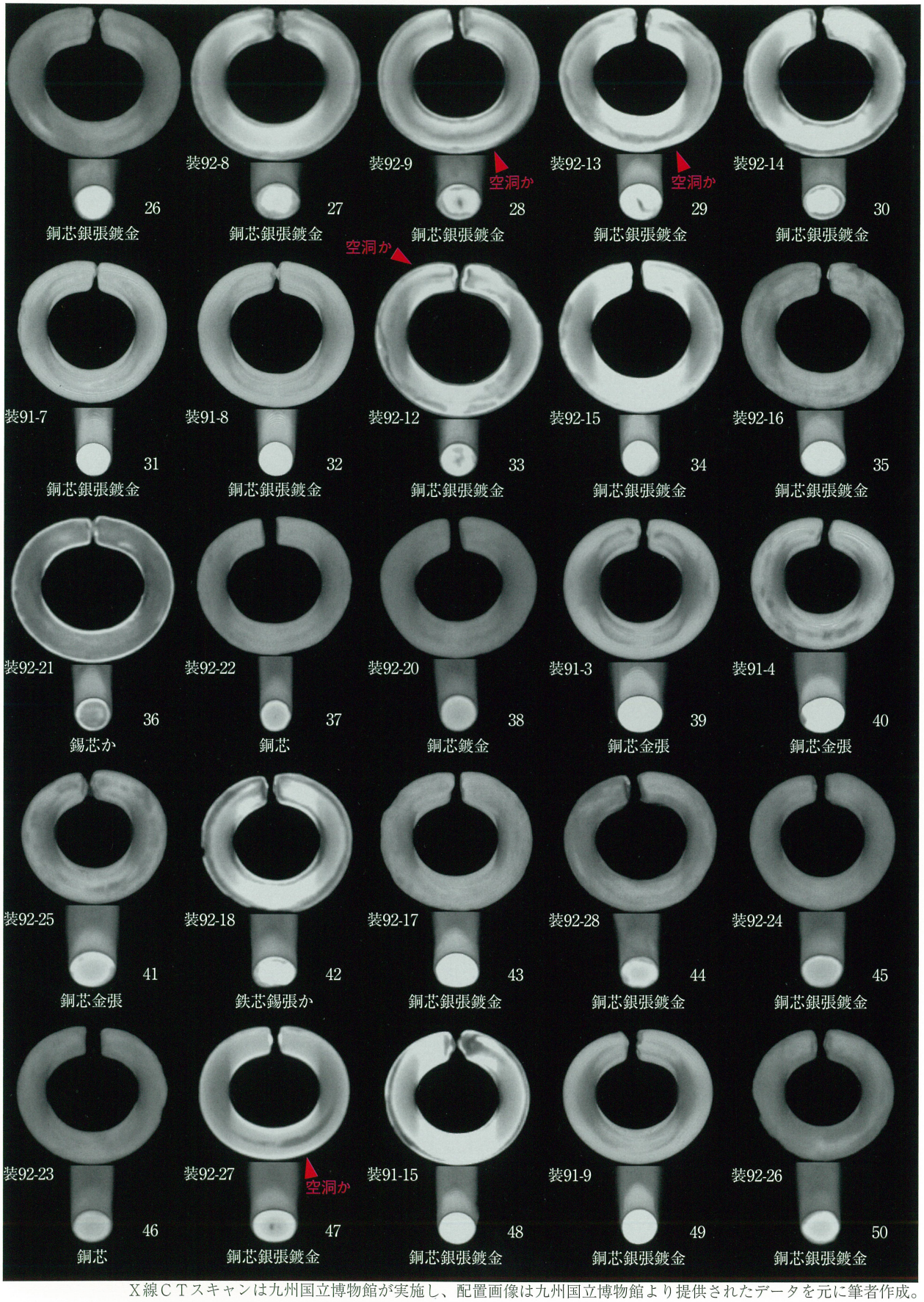
遺物番号は実測図の番号と対応。

宮穴横穴群出土遺物（抜粋）



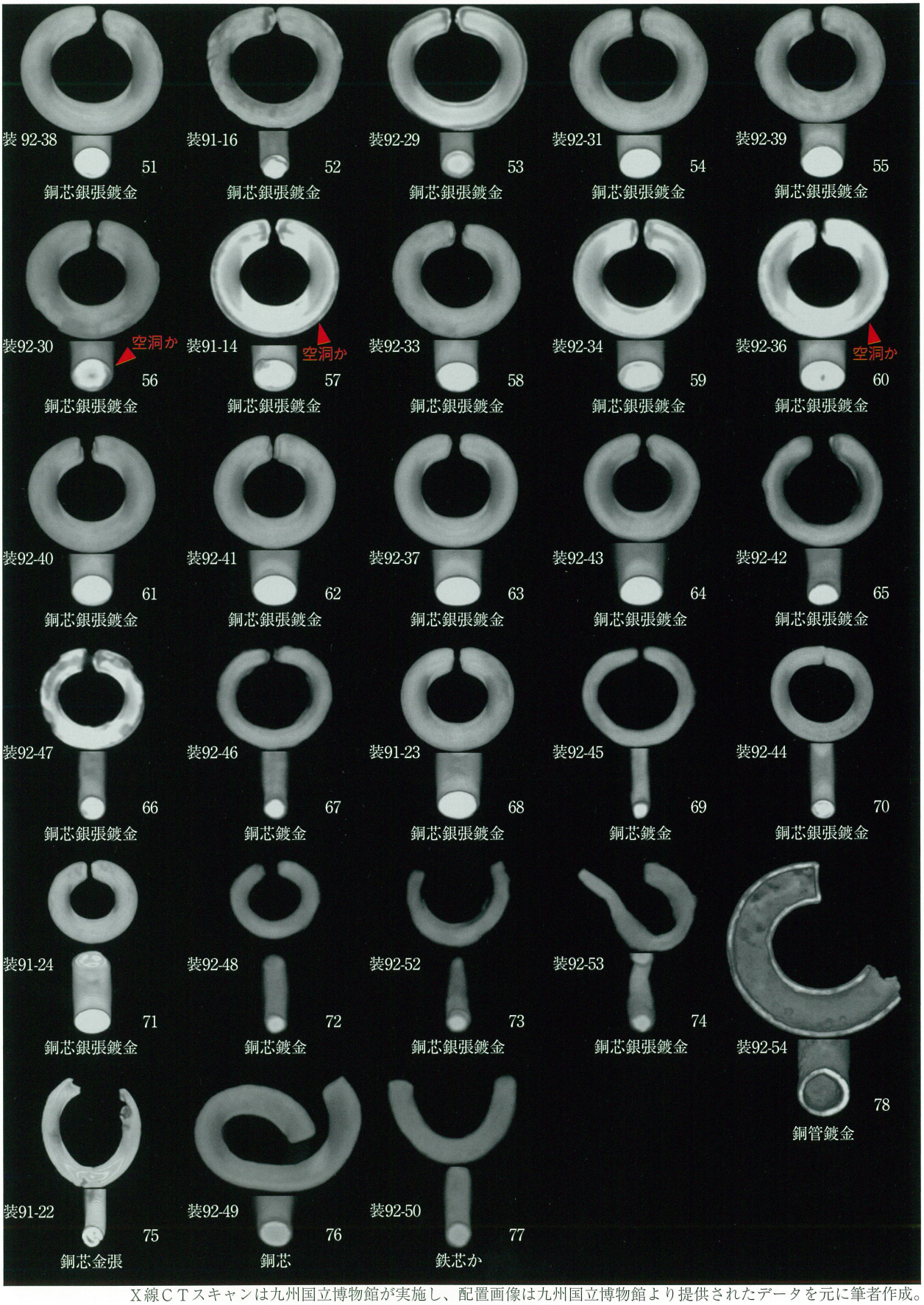
X線ＣＴスキャンは九州国立博物館が実施し、配置画像は九州国立博物館より提供されたデータを元に筆者作成。

宮穴横穴群出土耳環　X 線 CT 画像（1）



X線ＣＴスキャンは九州国立博物館が実施し、配置画像は九州国立博物館より提供されたデータを元に筆者作成。

宮穴横穴群出土耳環　X線 CT 画像（２）



X線ＣＴスキャンは九州国立博物館が実施し、配置画像は九州国立博物館より提供されたデータを元に筆者作成。

宮穴横穴群出土耳環　X線 CT 画像（３）